

# 旭川における家具デザインの展開と大学の役割

北海道東海大学芸術工学部 教授 小林 謙

## 1. 旭川家具

旭川は日本の5大家具産地（旭川・静岡・飛騨高山・府中・大川）のひとつに数えられている。他の産地が林業や、流通面での優位性などで、古くから指物・家具ないしは木工・工芸に特化していたのに対し、旭川家具産業の歴史はそう古くはない。北海道の中心に位置し森林資源が豊富であったとか、軍都建設や国鉄の施設建設のための木工技能者が多く存在していたなどの要因が語られるが、比較的簡単な技術で生産可能な家具は、典型的な地場産業として北海道では札幌・小樽・函館など消費のあるところに自然発生的に生まれ、発展していた。農業以外に特徴ある産業を持たない旭川で、家具産業は、産・官の協力、後に学が加わり、産業を担う人的な資源を育成することも含め、意図的・戦略的に育成され発展してきたのである。「優秀な素材の得やすいことは、なるほど大切な条件である。しかしより重要なことは素材に働きかける意志力と行動力、想像力といってもよい、このような力こそ産地形成の原動力となっているように思われる」木村光男（旭川工業高等専門学校名誉教授 旭川市木材産業工芸発達史）といわれている。

戦後の旭川家具は昭和30年代に入り、人工乾燥機の普及と共に家具産地が形成され、当初から産地単位で首都圏のマーケットを開拓していった。旭川家具の売り上げのピークだった1990年代初頭までは、先細りといわれながら旧来型のいわゆる婚礼ダンスなどを軸に、無垢の木材や職人の技術を売り物に、古い流通経路を温存して高級品市場で一定のビジネスを展開していた。バブル崩壊後はそれらの枠組みは一挙に崩れ、生産する品目に於いても、その訴求点に於いても、また販売経路や購入層も大きく変化した。かつて大正期に蒔かれた人的資源の種が、戦後少しずつ生長し、今や旭川の家具産業を特徴づけるものは、優れたデザインによる高付加価値の家具づくりとなった。

## 2. デザイン重視のものづくり

デザインを強く意識するものづくりの種を蒔いたのはある一人の人物によると言われる。松倉定雄は大正期に市の制度により工業技術研修生として本州へ送り出された。国の工業指導所勤務などをへて最新の家具の生産技術とともに、当時の日本で最先端のデザインの哲学や手法を身につけ、戦後、昭和24年になって旭川に帰ってくる。市立工芸指導所（昭和30年）を作り、後には大学の誘致や教育にも大きな影響力をもつようになる。松倉塾といわれ後に旭川木工デザイン研究会を構成する人々は、東京の全国優良家具展示会で入賞（昭和35,6年、40年内閣総理大臣賞）するようになる。また、この人の元でデザインに目を開かれ、昭和37年、42年に海外研修生としてドイツへ送り出された若い家具技術者が、現在の旭川家具の中核となっている人材である。こういった背景から旭川家具のデザイン認識は、家具を含む他の産業が陥りがちなデザインに対する誤った認識、すなわち表面を装飾するとか、ある時代や地域の形をまねるとか、まして売れているモノをコピーするといったことよりはるかに健全であった。すぐに販売に結びつく近くの流通業者の理解より、中央の百貨店などの目の肥えた顧客へ訴求をはじめに考えた。また旭川家具産業の担い手達は、家具のデザインという狭い世界から、デザインによるくらしの向上を標榜し、「'76旭川デザインシンポジウム」「'87旭川国際デザインフォーラム」「'88国際デザインフォーラム旭川」などグローバルな視野を持ったデザイン全般への啓蒙のための働きかけも行うようになる。

## 3. IFDAの開催と展開

家具業界におけるデザインの認識が、一業界の販売促進手段程度のことであったら、1990年からの国際家具デザインフェア旭川は成立し得なかったろう。

「国際家具デザインフェア旭川'90」(IFDA: International Furniture Design Fair Asahikawa)は、旭川開基百年を記念し「デザインは愛、木とくらし」の標語で全市を挙げて盛大に開催された。同フェアの企画と実施は、文字どおり産官学が一致協力してあつた(図3-1)。

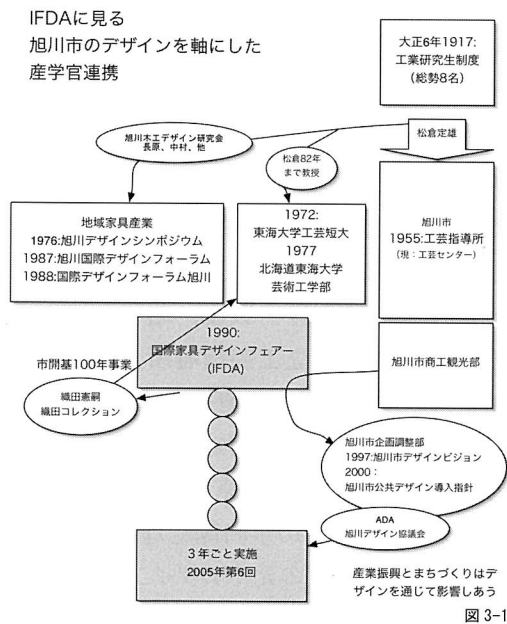


図3-1

北海道東海大学も、欧州方面へのPR、主行事や併催行事の企画立案と実施計画に全面的に協力し、この種のコンペ企画では最も重要なファクターとなる審査員の選定と交渉などを行っている。3年に一度開催され、現在まで6回の応募者総数は全世界から5300点にのぼり(表3-1)、幾つかのモデルは地元企業で生産されるようになってきた。

開催年	応募数	最高賞受賞者	最高賞の国籍
1990	472	Matti Ratalahty & Kaarle Holmberg	フィンランド
1993	993	Torben Skov	デンマーク
1996	1353	Steen Duelholm Sehested	デンマーク
1999	757	Daniel Lakos	ハンガリー
2002	820	Jens-Oliver Bahr	ドイツ
2005	909	桐本 隆士	日本

表3-1

次回は2008年6/25-6/29日であり審査員は、川上元美、深沢直人、織田憲嗣、ペーター・マリ、グニラ・アラード、ユン・ヨハン、長原實の各氏である。7回18年目にしてはじめて、地域家具業界から長原氏が

審査員になった。それまでは、地元直接利害を持たず、デザイナーとして実績ある客観的な立場の人物を起用し続けている。そのことにより家具デザインを理解する多くの人的ネットワークが生まれた。例えば、世界的に著名な椅子の研究家である織田憲嗣氏は、ある展示企画のために同氏収集のコレクションを借用したのが機縁となり、現在は北海道東海本学の教授に就任し、いわゆるオダ・コレクションとともに旭川の財産となっている。初回から審査委員を行っている川上元美氏以外、審査員達は何らかの形でこのフェアから繋がりを持った人たちである。旭川家具はこの行事によって膨大なデザインストックを有することになったが、より重要なことは国境を越え、家具という狭いジャンルを超えた幅広い人脈ができたことだ。

4. 作品から商品へ

一回から六回までのデザインコンペの受賞傾向を見ると、それまでにないオリジナリティ、徹底的にシンプルな造形美、生活・生産・環境等への提案性への評価と並んで、新しい造形をもたらす素材や木材加工技術、に対しても高い評価が与えられている。一回目グランプリ作品に見られる木材とカーボンファイバーの組み合わせ(写真4-1)、三回目の航空機用合板の使用(写真4-2)、四回目の成形合板の棚への利用(写真4-3)、五回目のマジックテープによる構造(写真4-4)などが評価されている。

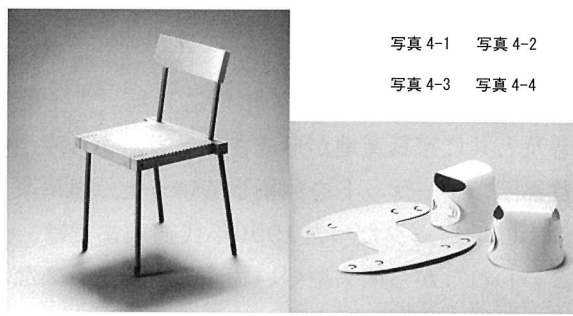
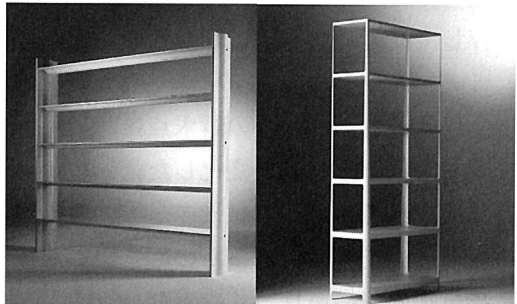


写真4-1 写真4-2  
写真4-3 写真4-4



写真提供: 旭川家具工業協同組合

旭川の家具業界では、これらの挑戦的な技術や新たな設備投資を要する製品も含めて、単なるコンペの「作品」に終わらせず、実際に商品化していく努力をしている。コンペ受賞の作品は良いデザインの「種」であるが、実際の商品にするためには戦略的なデザインマネジメント能力を必要としている。表面に表れる「スーパーデザイナー」の仕事に数倍する作業時間や費用をかけ、良いデザインをその優れた面を損なうことなく量産化し、適切な価格やプロモーション・流通などを整備して最良の状態まで届けるのはたやすいことではない。コンペで評価を得た作品が必ずしも良い商品になるわけではない。まして売れる保証はない。良い作品は「良い種」のようなものであり、良い土壌、良い肥料、良い手入れがなければ「良い作物」にはならないのである。IFDAに刺激されて各地で家具のデザインコンペが開催されているが、これほど多く実際に商品化している例は他の地域には見られない。多くは作品としてのデザインコンペまたは単なる地域の宣伝に終わっている。旭川ではコンペ作品を商品にするための様々なハードルを乗り越え、今やそれらの商品を核にして欧州の展示会へ出品、そこでの高い評価から欧州市場開拓を始めている。

## 5. 地域への大学の役割

北海道東海大学の旭川キャンパスは、1972年に東海大学工芸短期大学としてスタート、1977年に北海道東海大学芸術工学部として4年生の大学になった。その時点からデザイン学科、建築学科の2学科を有している。東海大学の文理融合（哲学あるものづくり）の理念や、デンマークの教育やものづくりを理想とする考えなどが、この地に芽生えつつあった家具づくりの志と共感しあったのである。

大学はこの地において35年にわたり人材の育成・供給を行ってきた。教育内容はデザインの多くの分野と建築を網羅しており、生産側から見れば大小様々な部品・資材から製品デザイン、展示場のインテリアデザインから建築まで、また会社のロゴマークやパンフレットやWEBページなど特徴を発揮すべき多くの分野にこの大学の卒業生が働いている。また消費者までの流通から見ても、商品、ショールーム、インテリアコーディネーター、住宅設計などを行っており生活デザイン全般を対象としている。デザインフェアの作品の商品化などのためには、社内デザイナーをはじめ

生産技術や販売スタッフまでデザイン・マインド（偏見ないデザインの理解）が必要だが、多くの卒業生がそういった役目を担っている。また、卒業生の多くは全国に散らばり、多方面の製造業で仕事をしている。今後はこれら一線で活躍している卒業生達の能力を地元産業に結びつけることも求められている。

良質なデザインが生まれるためには、それを生む地域の住人達の生活の質に対する意欲が基盤になり、大学は市民の意識向上のために様々なセミナーや公開講座・展覧会などを開催してきた。現在は旭川デザイン協議会など外部組織と共同してデザイン振興のための活動を推進している。

この大学では、北欧4カ国のデザイン・建築系の大学と学術協定を結んでおり、学生・教員の活発な交流を行ってきた。IFDAに見られるように地域産業と相互に連携してグローバルな活動を展開している。

## 6. デザインの認識

19世紀中頃産業革命後のイギリスで、粗悪な大量生産品の氾濫を嘆いたウィリアム・モリスは、その国の製品の低下は文化の低下であるとした。その考えがやがて物の美的な質を向上させるためアートアンドクラフト運動の流れとなっていく。クラフトの部分はそののちインダストリーに変わっていくが、物の質は文化そのものであるとの考えは近代デザインの根底にある。日本の家具市場では、輸入家具の総額4807億円（2006年度）の内アジア産が78%を占めており、また輸入家具全体で毎年200億円以上ずつ輸入量が増加していることから、特に量販店を中心にした大衆市場では、国内メーカーのシェアが大幅に減少している。

旭川家具にあっても高い技術とデザイン力を背景にして、世界に認められ自然に受け入れられる質を持ったものづくりを志向している。現在求められる物の質はプロダクト後のそれだけでなく、資源の管理から破棄にいたる生産工程全体の質である。輸入木材に依存している日本の家具産業であるが、旭川ではミズナラの植樹をはじめ端材を使った商品開発や家具の修理も行われている。木の生長を意識し、無駄なく使う技術や体制により十分な付加価値を生みながら持続する産業を目指している。旭川家具は上質なデザインにより生活の背景を整える長寿命のものへむかっているのである。